

分野	まち <small>⑧ 地域資源の活用</small>	取組期間	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	団体名	安芸高田市	所属	政策企画課	まち
取組事例名	小原未来設計プロジェクト 〔「小さな拠点」づくりモニター調査〕			連絡先	まちづくり支援係 ☎ 0826-42-5612 seisakukikaku@city.akitakata.lg.jp	連携団体等	小原地域振興会	ひと しごと

取組の概要 将来的な地域の在り方を創造し、実現するための計画を設計

小原地域は、過疎・高齢化が進む中、地域内に商店や飲食店が1軒もなく、日常生活に必要な物資を地域内で調達できない状況となっている。地域の現状、地域住民の意識・要望を明らかにし、地域が一体となって、将来的な地域の在り方を創造・実現するための具体的な計画を設計していく基礎作りのために、国土交通省の「小さな拠点」づくりモニター調査事業に取り組んだ。

取組の背景 JA撤退・商店の閉鎖・小学校の統廃合による地域存続の危機

小原地域では、平成11年にJAが撤退、唯一の商店も平成25年に閉店し、地域内に商店や飲食店は1軒もなく、買物難民問題が深刻化していた。また、地域芸能である「大土山田楽」を継承し、地域行事への積極的な参加や住民の指導による学習の実施等を通じて、地域との深いつながりを築いてきた小田小学校も統廃合が予定されており、住民が一体となったコミュニティ再生の仕組みの構築が求められている。

取組のねらい 地域の将来像を設計

小学校の統廃合問題を機に、地域の存続に対する危機感が高まりつつあることを受けて、ワークショップやアンケート調査を通じて、更に地域住民の意識を高め、地域が一体となった地域の将来像の設計を目指す。また、ワークショップやアンケート調査を通じて、住民の意見集約を図りながら、地域内の遊休施設の活用による「小さな拠点」づくりについて検討し、それを柱とする「小原未来設計書」を策定する。

取組の具体的内容 ワークショップ等を通じた住民の意向調査と地域の将来像の設計

小原地域振興会の中に「小原未来設計プロジェクト協議会」を設置し、具体的な調査・検討を進めた。高校生以上の全住民と、今は他の地域で暮らしている元住民にアンケートを行い、生活実態や求める生活サービスへの満足度、今後の地域活動への参画意向などを把握した。また、10代から70代まで世代ごとにワークショップを開催し、地域課題の共有を図るとともに、思い描く地域の将来像について話し合い、「小さな拠点」づくりに対する意識と参加意欲の向上を図った。あわせて、2回の講演会並びに2か所の先進地視察を行った。これらの結果を基に、これからみんなで支えていく小原地域を目指して、また、一人ひとりが参加できる組織づくりを目指して、「小原未来設計書」を作成した。さらに、次代を担う子どもたちの思いを小さな拠点づくりに反映させるため、小田小学校の協力を得て、「こんな小原になったらいいな!」という子どもたちが描く、小学生の視点による小原未来設計書を作成した。

取組に当たった課題・問題点 取組の周知と個人情報の壁

取組を地域住民に周知するためには、もっとアピールが必要である。(広報誌で取り上げて各戸配布したが、ほとんど見られていない。) アンケート対象となる住民リストが、個人情報保護のため行政から情報提供を受けられなかった。

創意工夫した点 きめ細かい住民意識の把握

プロジェクト協議会に若者や転入者、子育て中の女性などをメンバーに加え、日頃は地域運営に意見が反映しにくい住民の声を、協議に反映できるよう配慮した。10代～70代の世代別のワークショップによる、きめ細かい住民意識の把握に努めた。

取組の成果(効果) 将来、子供たちが帰って来たいと思える地域づくりが必要

年代別ワークショップやアンケート調査を通じて出された意見をまとめていくと、地域に対する一人ひとりの望みや夢が、たくさんあることが分かった。住民一人ひとりが、自分の出来る範囲で、地域づくりに参加しやすい組織づくりが必要であることが分かった。しかし、希望はあるものの、同時に一歩が踏み出せない地域性があることも分かってきた。まず、将来子供たちが、帰って来たいと思えるような地域づくりが必要であることが分かった。

今後の展開 「小さな拠点」づくりプランの実現に向けて

今回の取組が、「絵に描いた餅」にならないよう、地域住民一人ひとりが自分の出来る範囲で協力し、組織を形成し、組織間の連携による協働を図り、実践していくためにリーダー的な組織づくりを目指していく。地域内でお金が回る仕組み・地域にお金が落ちる仕組み・人が集まる仕組み・多くの住民が関わる仕組み・お互いが助け合える仕組み・地域資源(遊休施設、空家、耕作放棄地、歴史、人等)を活用する仕組み・地域の産業を活性化させる仕組み・防災減災のできる仕組み・地域内外の組織が効果的に連携できる仕組み・U1ターンに夢が描ける仕組み・高齢者が元気になる仕組み・地域で買い物ができる仕組み・声がこだまする賑わいのある仕組み等が行える組織づくり、を支える組織形成をこれから試行しながら進めていく。

他団体へのアドバイス 参加意識を高め、一体感を持たせる

- 地域住民全員が参加しているという意識を高めていくためにも、広い範囲での世代別の取組や、個人の意見を集積できる取組を行うことが大切である。
- 「動」を感じさせるためにも具体的な取組を行い、情報発信して関心を持たせ、地域内外からの「協働」を求めていくことが大切である。
- 地域の役員以外の女性、若者、外部人材などを活用することで多角的多様な視点を持った協議を進めていくことが大切である。
- 常にアンテナを張り、先駆的な地域の取組をモニターリングして、地域への汎用性を検討することが大切である。